人生を拓いてくれた「珠玉の言葉となみ投稿文」1970 年

ケエルの声　　なみ　第１５号　　1970 年 1 月 8 日発行

昔は暮らしやすかったなー。
なんでも夏になりゃーこの辺の田んぼはカエルの大合唱が聞かれたもんだー
それが近頃じゃーーーわずかに我々家族と少しのもんだけなってしもうた
ワイラの住みかに農薬なんてもんが入り込んで来てからだったなー
ドジョウもフナもウナギもみんないなくなってしもうた・・・・
淋しくなったもんじゃーー
ほんでも人間様はそのお陰で、お米は大豊作つうじゃーないかーー
おまけに、余った米は豚のエサにするっていうでねーかーー
わいらの死かばねを乗りこえて・・それが豚チャンのエサになるなんて・・・
なさけない世の中になったもんだのーー
むかしゃー、人間の小僧がこのあたりへワイワイと言ってなんかー
仲間をつかまえに来とったが・・・
今じゃーそんな小僧達も来んくなった・・・・
あの小僧らは今頃どうしているだんべーーか
きっと大きくなっているだろうなーー
ワイラの事でも時には思い出してくれてるべーーーかなー
なあ、昔の小僧達よー
ちったー暇があったら又ワイラに会いに来いよなーー
ワイラは冬は地べたにもぐっちゃうけど・・・・
春になりゃー、春になりゃーまた聞かしてやるでーーワイラの合唱を・・・・・・

BOOK　　なみ　第１６号　1970 年 2 月 6 日

人間がこの世にいる。タクサン・タクサンいる。
自分一人だけなら余りに味気ない、淋しい世だけど、仲間が沢山・沢山・沢山いる。
背の高い奴、低い奴、太い奴、細い奴、頭のいい奴、にすい奴、古い奴、新しい奴、気の小さい奴、大きい奴、ケチな奴、気のいい奴、山の好きな奴、嫌いな奴、音楽が好きな奴、パチンコの好きな奴、競輪の好きな奴、甘党、辛党と色々いる。
だから面白いんだ。苦しいんだ。悲しいんだ。楽しいんだー。だから生きているんだ。
生きているからには、自分の考えで、自分の思うように生きて行きたいと思う・・・それが人間だと思う。

自分は自分なりの人生を観る目、社会を観る目、己を観る目を養ってこそ始めて「大人」ではないだろうか。
そういう目を養う為には・・色々な本を読み、色々な人間（作家）の人生観を知り、その中から自分の人生観を作っていくのが良いと思う。私がみなさんにすすめたいのは、どんな本でもいいけど、そういう目を養うのに都合のいい本を読んでほしいと思う。

雑感　　なみ　１７号　　1970 年 3 月 6 日発行

石の上にも三年なんて諺があるけど、Ｇもこの 10 月でマル三年、一番重要な時期であり、真のＧ活動もこれからだと思う・・。最初の１・２年は面白みだけでも活動は充分出来るが、３年目となって来ると、ある程度アキの来ている人と、新しく入った人との間には必然的にギャップが出来る。そのギャップをどのように埋めて行くか・・・、これが難しい問題となって来ていると思う。ゲームばかり行っていても、山ばかり行っていても（好きな奴はいいけど）、ホステリングばかりでもアキが来る。人間なんて勝手な動物だ。その上、私の様な異端者が出て来るとなると・・・本当にむつかしいナ～～。そして近頃思うんだけど、バカな話でもいいから話し合う機会がなくなっていると思う。バカな話でも、合間にゃーまじめな話も飛び出す、そんな機会をつかんで、もっともっと若者同士の対話を復活（と言うべきか？）させるべきじゃーないだろうか。青春の特権は大ピラに悩めると言うことだ。そんな悩みを、夢を・・語り合う。そうなってこそ、豊川ユースホステルグループであり、本当のグループ員同士になるれと思う。

ワガ親父　　なみ　第１８号　　1970 年 4 月 5 日発行

親父（盆踊りで仮装）

そもそも、私の家は元来の三河人ではない。父母の出身は石川県の金沢市。なんでも先祖は加賀藩の家老とまでは言わないが、家臣の家来の足軽のなんとかをやっていたらしいけど、明治維新とともに廃業して、私の祖父の代では大工をやっていた。しかし、その祖父も父が１２才の時に脳溢血で急死した。その為父は祖母と二人で、非常な苦労をしたらしい。祖父が生きていた時は蝶よ花よ？と育てられ、祖父の死とともにドン底の生活に落ちた父は、高等小学校に入学したばかりで中退し、郵便局に勤めた。
父は２４才で結婚。もちろん見合い。昔の人によく有ることですが、母は父の顔も知らずに結婚した。すぐに長男と長女が生まれる。

<太平洋戦争勃発>

　軍需産業の急激な伸びと共に、豊川海軍工廠がものすごい勢いで膨張し、それとともに通信機能としての豊川郵便局も人手が足らなくなり、他県より人をかき集めた。その中に父もいた。もし、太平洋戦争が無かったら、私の家族もまだ金沢で生活していたでしょう。

　さて・・・豊川へ来てから、やっとのことで次女（姉）と私が生れたわけです。その時父はざっと４０歳。この年齢のギャップがあった為か、４人目の子供であったのでアキが来ていたのか知らないが、遊びに連れて行ってもらったこともほとんど無いし、話し合いなど全くしたことなど無い。私にとり、父はこわいものとしての存在でしかなかったのかも知れない。その上父は、自分の過去の苦労を、息子達だけにはさせまいとしていた。父に一度、「俺がしたような苦労は、俺だけでたくさんだからなーー」と言ったのを聞いたことがある。それが親父の子供に対する教育観だったのだろう。だも、私にとって、それを今から考えると残念でならない。諺に「若いうちの苦労は買ってでもせよ！」というのがあるが、この諺どおりに父が教育してくれたら、もっとしっかりした男になっていたと思うのに。死んだ親父に勝手なことばかり言っていると、地下から怒って出て来ると困るのでやめにして・・。

　父は自分の死を知っていた。２月の中頃から死との対話をしていた。非常に苦しく、非常に悲しかっただろうと思う。日、一日と腕は骨と皮ばかりになっていった。自分の葬式で飾る写真を見たいと言って焼かせたり、戒名も自分で決めたり。亡くなる 12 時間前には５月に結婚する息子（私）の為に、結婚式用にと高砂を謡ってくれた。・・・・最期も静かだった・・・。

今、考えると父の死は、残念でしょうがない。何も親孝行出来なかったことが・・・。

父の「おわかれ二題」（父は碁石を生涯の友とし、酒とタバコを離しませんでした。）

一、　足しびれ　内臓すべて　焼けしよう　鏡に映る　ひげも動けず

二、　わがひげも　黒と白との　にらみあい　一石どうだい　えんま大王

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

１９７０．９．２６　　新田次郎「孤高の人」より

・　彼は、冬山で孤独を味わった。その孤独が神戸に帰って来てみると、無性に恋しくなるのである。

　あの孤独こそ山の魅力であり、妥協を許さない峻厳な寒気こそ長いこと山にもとめていたもの‥‥‥。

・　「いんやさびしくなんかあらすけえ、さびしくなったら、おらあ歌を歌うんだ」
・　孤独を求めながら、孤独から逃げ出そうとした
・　山を歩く時本当に何も考えないでいるだろうか
・　おそるべき孤独が加藤をしめつけた
・　登山とは汗を流すところであり、自分と語り合う場である
・　単独行は淋しいものである。しかし、その淋しさ以上に自分と語り合う楽しみがあった。
・　なぜ人をたよろうとするのか
・　山があるから山へ行くのだ。山がなければ行きたくても行けないだろう。がしかし、山がない場合、彼はどこへも行かずに、ぼんやりしていられるだろうか。・・・・
おそらく彼は歩きまわるだろう、歩かずにはおられないのだ。それではなぜ歩きたいのだと問いつめられれば、おそらく歩きたいのだ、歩けば気持いいのだと答えるにちがいない。

１９７０．９．２６　　ＪＹＨ新聞より
・　オアシスの掟「あとにくるもののために泉の水をよごすな」
・　青少年の反抗は、年上の世代の自信喪失を反映している
・　ＹＨを欲しない、考えてもみない、全然異なったものにしようとする者たちに、ＹＨ運動を任してはいけない。
・　２０年代のホステラーは、リュックを背負ったハイカーだった
・　ホステラーがいなくなるのは商業的な「消費観光旅行」にＹＨ運動がとってかわられる時、自由放任すぎて、教育という力の外に出てしまった時である。茅誠司
・　人間としての幸福は心の持ち方次第であった

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

日本人　　なみ　第２６号　1970 年 12 月 6 日発行

　私は、日本人程自信を持たない、余裕が無い人種はないと思っている。
日本の歴史の流れは、古代より、支配者の変転の歴史であり、大多数の被支配者（我々）は、何ら口を出す機会を与えられなかった。それが、支配される人間の虚弱な思想を作り上げてしまっている。それが、現在の民主主義と言われる今日でも続いている。
「何も知らないけんど、投票すりゃーいいずらー」、「誰かさんが言った出よー入れとくかー」。こんな気持ちで一票を投ずる人間が多すぎる。自分とは何か？何故生きているのか？何故に・・・・という、人間の根本の問題を忘れ、ただ刺激を、変化を求め、自分

のホンノ小さな周囲の事しか考えずに、一日一日を暮らして行く。
これで本当の人間と言えるのだろうか？これで大脳のデッカイ動物だと言えるのだろうか？
こんなことなら・・猫や犬と何にも変わらないのではないか。
悪を見ても悪と気付かず、善を見ても善と気付かない。そんな人種であって良いのか。
ゴミを捨て、汚れた所を見ても知らないふりをし・・・・。
カラーテレビが高い高いと言われ、そして、それが格安で輸出されていても、何も感じないでいて・・・。
　下北半島のサルが、北限のサルが、林野庁の撒く除草剤によって、その命に危機がおとずれようとしていても、知らない顔をしていて・・。大台ケ原の原生林が、サルやカモシカの楽園が、原生林よりヒノキが儲かるという理由だけで破壊されて・・・良いのだろうかーー！！
私にとっては、余りに感じない日本人が多過ぎる・・・・と思う。